

大 阪 日 々 新 聞

二百五十四号



娘のそのの見へ給不驚きまことよ
 入水と聞てあつてもいふれ我身女のうへに母養ひ心かま
 せぬのくまら非命の殺せし度皆我身の罪なりとていふもの
 入水と三休橋より舟へし折や一通り小舟の上かちり舟頭
 推せ置厚くいひしして命らうと日くけり
 押櫻記

母と娘の三人住まざる縁もいふは細き煙と立
 かたの憂の中は母又病の床にまゐりて泣く泣
 娘又のいふもせんことありたり又舟車を
 川竹が沈める母の業用心の伏とす
 もる人も有るれと娘が言きめりせんを
 亡父へいふを云ふまゝいふとて外か
 ちりぬるれ食用も朝多かきを
 病苦をいひて三休橋の
 辺りへ身を
 川中へ投り死せり

塩町二丁目

川傳祥